



脚本

「喫茶パピヨン」



寒竹泉美

脚本・喫茶パピヨン

寒竹泉美

〈登場人物〉

■サラリーマンの男……外回りをさぼって喫茶パピヨンで休憩しようとする。

■謎の女……パピヨンの片隅に座り、男をにらみつける謎の女。

■マスター……ほめ言葉に弱い適当な性格。店はひとりでやっている。

■常連の男……マスターの友達。恋話と賭けが好き。

○昔ながらの喫茶店。看板も内装もセンスが悪く、やる気が感じられない。カウンター席が奥にあり、舞台中央に二人が向かい合わせに座れる小さなテーブル席がひとつある。カウンター席の下手側には常連の男が座り、カウンター内のマスターと喋っている。

○舞台中央のテーブル席には、謎の女がひとりで座ってコーヒーを飲んでいる。

○サラリーマンの男が汗を拭きながら下手から登場する。

男「あつついなー。こういうときに限って、いつもの店が満席だったりするんだよなあ。このへんにほかにカフェなかつたっけ。

お、あつた。喫茶店、発見。喫茶パピヨン……って、ヨの字が左右逆になって英語のEになってるけど大丈夫かな、ここ。……まあいっか。空いてそうだし、クーラー効いてて座れば」

男は上手側に歩いて行って、店の入り口から中に入る。ドアのベルが鳴る。その途端、中央に座っていた女が、

立ち上がり、驚愕したように入ってくる男を見つめる。

男「クーラーあんまり効いてないなあ……（女に気づいて）って、うわ。そんな目で見なくてもすぐにドア閉めますから」

ドアを閉めても反応が変わらない女に首をかしげながら、男はカウンターの上手側に座る。何度か振り返るが、女は何かを言いたそうに男を見つめている。女と目が合うたびに、男はびっくりしてカウンターに向き

直る。

マスター「いらつしやい」

マスターがカウンターの中から男に水を出し、メニューを差し出す。ぞんざいな手つきだが、男はそれよりも背後の女が気になって仕方がない。マスターは男の様子に気づかず、カウンター内の下手に退場。

女はソファーに座りなおすが、相変わらず男をにらみつけている。そのうち、帰れー帰れーとつぶやきなが

ら男の背後に念を送るようになる。

男、振り返って驚く。

男「(ひとりごと) 知り合い…じゃないよな。なんなん
だ」

男、助けを求めらるるようにカウンターで新聞を広げている常連の方を見る。常連が気づいて顔を上げる。

男「(こっそり女を指さす) あれ、何なんですかね」

常連、振り返って女を見る。女は相変わらず、男に何か言いたそうである。

常連「驚いているんじゃないか？ この店に客が来るのが久しぶりだから」

男「あんなに驚くほど、客が来ないんですか？」

常連「そうだ。いつ来ても空いてる喫茶店。このへん

じゃ、なかなかないよな。贅沢な店だ」

マスターが奥から出てくる。

マスター「うっせえ。お前が居座ってるから客が寄りつかないんじゃないか。この貧乏神」

常連「ひどいなあ、マスターは。貧乏神って言うなら、俺よりあの女のほうが怪しいだろ。最初にこの店にいたのは俺だからな。女があとからやってきて、そ

れつきり客が来ない。ということは、貧乏神はあつちじやないの？」

マスター「うーん、じゃあ、お前は、貧乏神を呼び寄せたってわけか」

男「(ひとりごと) っていうか、客が来ないのは、この店のインテリアのせいじやないかと……」

マスター「注文は？」

男「(慌ててメニューを見て) コーヒーとトーストで」

マスター「はいよ」

マスター、下手に退場。常連は新聞を読み始める。男は水を飲んでひと息つくくと、メニューでぱたぱたとあおいだりする。

舞台中央、女は男に念を送るのをやめて、何かひらめいた様子。カバンをぐそぐそしはじめ、紙とペンを取

り出す。男は女の様子をちらちらと気にしていたが、やがて気にするのをやめ、カウンターに向き直る。

女はできたーというように紙を掲げ、席を立つと、中腰の怪しい動きで男に近づいていく。紙を持って男の右側にぴたりと立つ。

男「（ようやく女に気がついて）うわああ」

女は、しいっと指を口にあて、カウンターに紙をそつと裏返して置き、また怪しい動きで自分の席に戻る。

男は紙を不気味なものを見るように眺めている。女が、早く読め、とジェスチャーでアピールするので、仕方なく、恐る恐る紙を手にとって眺める。

男「（棒読みで）『コーヒーの感想を口にするな』

……何だこれ。意味が分からない」

マスター「はい、お待ちどうぞ」

突然現れたマスターに驚いて、男はとっさに紙を隠す。

マスターはトーストとコーヒーを男の前に並べていく。がちやがちや音を立てて、かなり適当な接客態度。男の動揺もまったく気づかず、常連の近くまで戻って、男に背を向けて、テレビを見始める。

男はメモとコーヒーを交互に眺める。女は男を見つめている。コーヒーがよほどまずいのだろうと男は予想して、恐る恐るコーヒーカップを持ち上げて、そつと一口飲む。

男「あれ、このコーヒーおいしい……」

女、がばりと立ち上がった、ずかずかと男に駆け寄る。

女「(しらじらしく)すみません。よかったら、こっちの席でわたしとお話ししませんか？」

男「はあ？」

女「(男の反応を無視して強引に)わあ、嬉しい。移動してくれませんか。わたし、あなたが入ってきた

ときからずっと気になってたんです」

女は勝手に次々とトーストや水を自分の席に運んでいく。男、女の席まで歩いて行って、

男「ちよつと、何なんですか」

女「(まじめな口調にがらりと変化して)座ってください。大事な話があるんです」

男、しぶしぶ座る。カウンターにいる常連客がふたりの様子を気にしている。

常連「(マスターに) おいおい、あれ、逆ナンってやつか？」

マスター「あれ、移動したのか。客なんか来ないのに、わざわざつめて座ってくれなくてもいいのにな」

常連「いや、そういうことじゃなくて。ナンパだよ。

女の方が男を誘って、あつちに移動したんだ」

ここからカウンターのふたりと、テーブル席のふたりの会話が交錯する。テーブル席の会話は、ところどころ抜け落ちながらカウンターに聞こえるらしい。カウンターの会話はテーブル席には届かない。

女「あなたは奇跡を信じますか？」

常連「聞いたか？ 奇跡がどうか言ってるわ。いや

あ、キザだねえ。ちよつとおじさん、わくわくして
きた」

男「宗教勧誘ならお断りします」

女「(慌てて)あ、そうじゃないんです。えつと、あの、

あ、そうだ、あなたはコーヒーが好きですか？」

男「すみません。話がまったく見えないんですけど」

マスター「(一生懸命聞き耳をたてている常連に向かって) あんたも暇人だねえ」

常連「暇だからここに座ってるんじゃないか」

女「(情熱的に) わたしは好き。愛してるの」

常連「わ、聞いたか聞いたか? いきなり愛してるって言いやがった。いやあ、この頃の若いやつは大胆だなあ」

女「特に、このこのコーヒーは、ほかでは飲めない最高級の味なの。分かる？」

男「確かに、このコーヒー、うまいですけど……。だからどうだっていうんです？」

常連「なあ、マスター、（ふたりをそっと指差して）あれがうまくいくかどうかどうか賭けようぜ」

マスター「じゃ、俺、ふられるほう」

常連「いやあ、マスターは恋というものが分かってないなあ。恋ってのは、出会いがしらの事故なんだよ。

どーんと衝突して、その衝突エネルギーが恋心に変換されるんだ」

マスター「あんた、難しいこと知ってるな」

常連「俺、一応、大学では理系だったからな。とにか

く、女のほうが愛してるとまで言ったんだ。あとは
反応が進むのを待つだけだ」

マスター「（ふたりを眺めて）でもなんか、仲悪そうだ
ぞ」

男と女は沈黙している。男はいい加減にしてほしいと
疲れ切った表情。女は何から説明したらいいか、考え
ている。

常連「(分かってないなあというように) あれは照れてるんだよ」

電話のベルが鳴る。電話をするために、マスターは下手奥に退場。常連はふたたび新聞を広げて、二人の様子を聞き耳立てる。

男「あの、(トーストを指さして) これ、食べていいですか？」

女「(真面目に) どうぞ」

男「トーストにかぶりついたとたん吐き出して、
まずっ…！ 何だこのトースト」

女「(真面目に) そう、まずいんです」

男「まずいんですって、真面目に言われても。トーストなんてまずくなりようがないだろうに」

女「まずいのはトーストだけじゃないんです。オレ
ン ジュースも、紅茶も、ミルクも、ホットケーキも、
サンドイッチも、ケーキも、全部まずい。飲み物や
食べ物だけじゃない。この店の内装もBGMのセン
スもマスターの接客態度も、全部がまずいんです」

男、あたりを見回して、確かに、というようにうなず
く。

女「でも、コーヒーだけは奇跡的においしい」

男と女、無言で顔を見合わせる。

女「これで、わたしの言いたいこと分かってくれましたか？」

男「いや、全然」

女はマスターが引っ込んでいるカウンターの奥に視線を移す。常連は、慌てて顔を新聞紙の中に隠す。女は

常連の動きには気が付いていない。

女「このこのマスター、ものすごくお世辞に弱いんです」

男「……はあ」

女「ほめると調子に乗るんです」

男「……はあ」

女「いったん調子に乗ってしまったら、もう誰にも止められない。そして、なぜか、あり得ない方向に爆走してしまふんです。この店のインテリアだって、わたしは来始めたときには、まだましだったんです。たった、一回、女の子のコスプレ集団が気まぐれに入ってきて、きゃー、なんかレトロ、かわいいーって言ったんです。そうしたら、マスター、はりきってしまって、次の日にはこうなってしまった。また別の日に、今度はすごくお腹を空かせた男が入ってきました。そいつは、トーストとミルクティーを

頼んで一気に流し込んだあと、おいしかったーと叫んで走って出て行ったんです」

男「走って？」

女「食い逃げでした。でもマスターは、おいしかったーのひとことが気に入ったのか、逃げられたことはあまり気にしてませんでした。それ以来はりきってしまつて、腕によりをかけて作られるようになったのが、そのトーストです」

男「じゃあ、ほかのメニューも同じように……」

女「はい。でも、このコーヒーだけはまだ無事です。

幸い、こここの常連は味が分からない。だから、新しく客が入って、うっかりコーヒーの味をほめなければ、この味は守られるんです」

マスターが電話を終えて出てくる。

マスター「(常連に向かつて) どうなった？ どうなつた？」

常連「なんか話しこんでるみたいだけど、どうなってるのか、よく分からないな……。ああもう、じれったいなあ。愛は理屈じゃないんだ。がばつとこっちまえ、がばつと」

男「あなたの熱意は分かりましたよ。(あきれたように) でも、じゃあ、あなたは、新しいやつが来るたびに、

僕に言ったことと同じことを言うんですか？」

マスター「(はしやいで)聞いたか、聞いたか？ 男なら誰でもいいのかって、責められてるぜ。やっぱりなあ。愛してるなんて、軽々しく口にするもんじやない。賭けは俺の勝ちだ。(手のひらを差し出して) ほい、千円寄越せ」

常連「いやいや、待て待て。男のその発言は、嫉妬心から出たんだよ。嫉妬するってことは、もう相手に

惚れてるってことだ……」

女「(ちよつと興奮気味に) 自分が馬鹿なことをしているってのは分かっている。でも、どうしても失いたくないの」

常連「来たー。来た来た来た来た。決めゼリフ。あなたを失いたくないの。これで落ちなきや男じゃない。どうだ？」

マスターと常連は身を乗り出して二人を見守る。男はため息。女も喋り疲れてソファーにもたれる。常連とマスターは、しばらく聞き耳をたてているが、ふたりに動きがないのでしびれを切らす。

マスター「黙っちまったな。どうなったんだろ。ちよつと俺、様子見てくるわ」

常連「よけいなこと言うなよ」

マスター、水差しを持ってカウンターから出ていき、二人の席へ。二人は噂の当本人のマスターが来たことで、ますます気まずそうに黙りこくる。マスターは、異常にゆっくりと不自然な動作で水を注ぐ。そして、気持ちが悪いほどの愛想笑いをふたりに順番に向ける。注ぎ終わってから、名残り惜しそうに傍らに立っている。

男「あの、何ですか？」

マスター「(常連の方を振り返りながら)何ですかって
言われちゃったよ」

常連、ばれるからこつちを向くなと必死にジエスチャ
ーでアピール。

マスター「ええつと、コーヒーおいしい？」

女と男はびくつと反応する。女は熱心に男を見つめる。

男「えっと、いや、おいしいっていうか、あんまりおいしくないっていうか」

マスター「(ゴ)機嫌な様子で」だよねえ。こんな黒くて苦いだけのもの、おいしいわけないよね」

マスター、上機嫌で去っていく。男はぽかんとしてマスターの後ろ姿を見つめる。

男「何あれ、どういうことだ？」

女「マスターはコーヒーが嫌いなんです」

男「はあ？　じゃあ、なんでこんなにおいしいコーヒーをいれられるんだ？　……っていうか、そもそも、なんで喫茶店やってるんだよ」

女「それが分からないのです。だからわたし、最初にききましたよね？　あなたは奇跡を信じますかって」

マスター、カウンター内に戻って嬉しそうに常連に顔を寄せる。

マスター「(勝ち誇って) やっぱり俺の勝ちだ。男のほうは、コーヒーがあんまり好きじゃないんだって。いつもコーヒーしか頼まないあの女とは趣味が合わないな」

常連「いやあ、まだ分からんぞ。趣味が違っても愛は

成立する」

男「（しみじみとコーヒーを眺めて、何だか愉快になりながら）コーヒー嫌いの入れたコーヒーか。愛はなくてもおいしいコーヒーをいれることはできるんだな」

マスター「やったー。聞いたか？ 愛はないって言ったぞ。ほら、俺の勝ちだ。寄越せ」

常連「（しぶしぶ財布を取り出しながら）愛はないか。

しかし、あの男もはっきり言うなあ。ああ、笑ってら。乙女の決死の告白を、笑うことはないだろう。ああ、せちがらい世の中だなあ。一体、愛はどこにあるんだろうなあ」

エンディングBGM流れ始める。常連とマスター、喋りつづける。男、コーヒーを飲む。おいしい、というジェスチャー。女と顔を見合わせて、ちよつと笑いあう。なんかいい雰囲気。愛がめばえたかも？ BGM盛り上がって、ゆつくりと暗転。終わり。